

# 「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味

—— *Tissametteyyamāṇavapucchā* より ——

岸 本 正 治

## はじめに

これまで『スッタニパータ』第 4 章、第 5 章の内容について 2 度発表してきたが、できるだけ正確に意味内容を明らかにするための方針があるので、次に掲げる。(1)『スッタニパータ』第 4 章、第 5 章がすべての経典の中で一番古層に属するので、参考される文献は同時代か古いものを原則とする。(2) そうするとかなり参考文献が限定されるが、登場する用語が同じく第 4 章、第 5 章のほかの経にあれば、その用法と内容から研究対象の句の意味をある程度、囲い込むことができる。(3) 仮に、第 4 章、第 5 章以外ほかの経を参照する必要性が出て来た場合は、同じ『スッタニパータ』の第 1 章～第 3 章までとする。その時は第 4 章、第 5 章とは明らかに違う特徴点を、その都度明示するように心がける。

特に (3) については後代の文献の意味や思想が先代にあたる『スッタニパータ』第 4 章、第 5 章に逆流してしまうことを怖れるので、拙論に関する限り上記のように限定することにした。

今回は第 5 章、*Tissametteyyamāṇavapucchā*<sup>1)</sup> を取り上げる。この経はわずか三つの詩句よりなっているが、関連する経も交え内容を吟味する。その上に立って「両極端を自証して中間にも汚されない」の意味を論考する。

## *Tissametteyyamāṇavapucchā* の内容

- 1040 ティッサ・メッテイヤさんがたずねた<sup>2)</sup>。  
 この世で満足している人は誰ですか？  
 動揺すること (iñjitā) がないのは誰ですか？  
 両極端を自証して (abhiññāya) 中間にも汚されない賢者は誰ですか？  
 あなたは誰を偉大な人と言いますか？  
 誰がここに愛着 (sibbanim) を越えたのですか？
- 1041 メッテイヤよと世尊は答えた。

「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味（岸 本） (203)

諸々の欲望について梵行のあること（が必要です）。  
 渴愛を離れ、常に注意を保ち (satā),  
 究めて (samkhāya) 寂靜に至った (nibbuto) 修行者——彼には動揺は存在しません。  
 1042 彼は両極端を自証して、中間にも汚されない。彼をわたしは偉大な人と言います。  
 彼はここにおいて愛着 (sibbanim) を超えたのです。

まず全体を概観すると、次の特徴がある。1040でティッサ・メッテイヤがブッダに対して五つの質問を続けることである。それぞれ「誰がそうなのか？」と聞いている。これに対し1041, 1042でブッダがその質問に答えるわけである。しかし、ブッダが該当する人の名を上げることはない。ましてや「それはわたしだ」とは言わないわけである<sup>3)</sup>。これにはブッダの生きて行く姿勢がそうだからと言えるし、もう一つは五つの質問内容について、誰でもが乗り超えられるものであるという強い思いがあったからだろう。

五つの質問に対し、1041, 1042でブッダはまとまった答え方をしている。ただし、1042にある句は1041のグループに入れていないので、特に重要な意味をもつものであると、考えられる。

それでは用語の説明に入りたい。1040に動揺すること (injitā) が出て来るが、これは私たちが日常生活で経験することよりも本質的なことである。「動揺することがない」は単に「落ち着いている」以上の意味がある。1041のブッダの言葉にあるように「寂滅した (nibbuta)」状態になることを指す。

「両極端を自証して (abhiññāya) 中間にも汚されない」はこの拙論の主題でもあるので、別に項目を立てて論考する。

1041に「梵行のある (brahmacariyavā)」という言葉が出て来る。ブラフマチャリヤはバラモンにおいて、極めて大事な言葉であり、古来生き方の指針となるものである<sup>4)</sup>。しかしブッダがブラフマチャリヤの内容に言及した経は第4章、第5章の他の箇所にはない。なぜここでブラフマチャリヤをブッダが出してきたのか。それはティッサ・メッテイヤがバラモン出身であったからかも知れないが、これは推測の域を出ない。また、ブッダがバラモン世界で使われる用語を持ち出す時は特別な意味があることを注視しなければならない。例えば「バラモンは…」という詩句が第4章、第5章に散見されるが、これにはバラモンはこうあってほしいという強い希望が出ており、ブッダが「バラモン」を再定義しているとも言える。つまり当時のバラモンへの批判がそのような言葉となって表れていると見ることができる。1041の冒頭から続く次の句は、「ブラフマチャリヤ」に対する

(204) 「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味 (岸 本)

ブツダの定義だといえる (下記).

渴愛を離れ, 常に注意を保ち (satā),  
究めて (sakhāya) 寂靜に至った (nibbuto) 修行者——彼には動搖は存在しない.

### 「両極端を自証して中間にも汚されない」(1042)

経を見る限り, この句と前後の句のつながりは明確には示されているとは言えない. だからブツダは一般的な話に切り替えてティッサ・メッテイヤに語ったのだという見方もできる. 「両極端を自証して (abhiññāya) 中間にも汚されない」とは, 「何事によらず, そうあるべきだ」とブツダは説いているということになる. しかし, 第4章, 第5章にある詩句の全般の傾向を見ると, 前後の句と関連を持たず, 一般的なことをブツダが語ることは少ない.

そこで他の経を参考にしていきながら, その意味する内容を掘り下げていきたい. ここでは 839 を取り上げる.

839 教義ではなく, 天啓でもなく, 知識でもなく, マーガンディヤよ, と世尊.  
また戒や禁制でもありません. それらによって清らかになるとは説きません. 教義, 天啓, 知識, 戒, 禁制がないから清らかになるとも説きません. これらを捨てて取らず, 寂靜であって, 依存することなく, 生存を熱望してはなりません.

この経は「両極端を捨てよ」と説いている. ただし中間については述べていない. この経を参考にし, *Tissametteyyāmaṇavapucchā* に戻ると, 1042 の最初の部分は次のような解釈が可能であるだろう.

渴愛を制止すること, あるいは渴愛を容認すること, この両極を自証した上で捨て, 中間にも汚されない.

ただし, 次のような誤った解釈も可能ではある. 両端を A 点, B 点そして中間に C 点を同時に置き, 順に消去していくやり方である. 時系列で進んでいく人間の行為を除けたならば, そのような理解もできるが, あくまで時間とともに進む人間の想いや行為そのものをブツダは問題として取り上げているのだ. その上に立つなら, 「中間」については次のように理解するのが適切であろう.

両極端が自証によって捨てられたなら, 両極端によって存在する中間は存在できなくなる. だからもはや中間に汚されるということがなくなる.

こう見て行くと, 「自証して」の *abhiññāya* < *abhijānāti* [*abhi+jñā*] は重要な意味をもつことが分かる. ここでは「自証する」としたが, 「知る」という訳も決して誤りではないだろう. PTS のインターネット辞書では *to know by experience*,

「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味（岸 本） (205)

to know fully or thoroughly, to recognise という意味が並ぶ。これらも参考にするなら「目で見て知る」「耳で聞いて知る」という単純な「知る」ではないと推測される。そもそも両極端を作って見ているのは誰であるのか？

「自分の認識」に対する疑念をもった上で、疑念を解決する「知る」があるのだ。拙訳の「自証して」もそのような意味を少しはもたせたつもりである。この語は第4章、第5章の中だけでもいくつか出ているが、その用例の比較だけでは正確な意味を導き出すことは難しい面がある。比較する量をしっかりしておく必要があるからだ。そのためには、『スッタニパータ』第4章、第5章全体に対する正しい理解が求められる。

そして1042の最終のことばとして、

彼はここにおいて愛着を (sibbanim) 超えたのです。

がある。これは1041にある「渴愛を離れ」と重なるような言葉であるが、ここで言う「愛着」とは前句の「両極端への愛着」のことを指す。

## むすび

今回は、極めて少ない句からなる *Tissametteyyāmaṇavapucchā* の中から特に「両極端を自証して中間にも汚されない」について論考した。第4章、第5章を通じて、この部分は非常に大切な句である。もし、こころの成長や精神の発達、それらの先にニルヴァーナがあるとすれば、両極端という語に代表されるように、私たちの内にある二元的見方では何の未来も提示できなくなる。なぜなら、そういうものの存在は言語をあやつる私たちのこころの中においてのみあるからだ。一種の虚構と見てよいだろう。この虚構を見破ること、それが「両極端を自証する」にほかならない。

実は『スッタニパータ』第4章、第5章には今回の「両極端と中間」以外に「両極端」(801)そして「等しい、すぐれている、劣っている」の三種(842)、さらに「上と下と四方そして中間において」(1055)という言葉まで登場する。しかし、西洋哲学的な論理面だけでは、解明していくことは難しいと思われる<sup>5)</sup>。これらはそれぞれの経の中で意味内容を、個別にとらえて行く必要があるだろう。ただ共通のキーワードを立てることができる。それは「虚構の看破」である。

1) このティッサ・メッテイヤという同じ名の経が第4章814-823にあるが、この経との関係は分からない。

## (206) 「両極端を自証して中間にも汚されない」という意味 (岸 本)

## 2) 1040

“Ko 'dha santusito<sup>1</sup> loke,  
 icc-āyasmā Tisso Metteyyo<sup>2</sup>  
 kassa no santi iñjitā,  
 ko ubh' anta-m-<sup>3</sup> abhiññāya majjhe mantā na lippati<sup>4</sup>,  
 \*kaṃ brūsi mahāpuriso ti, ko idha sibbanim<sup>5</sup> accagā”<sup>6</sup>

1 B<sup>aim</sup> santussito  
 2 B<sup>aim</sup> Fsb. Tissametteyyo  
 3 Fsb. ubhantaṃ 4 B<sup>aim</sup> limp-.  
 \*to \*C<sup>kb</sup> omit.  
 5 B<sup>ai</sup> sippa-, B<sup>m</sup> sibbi-.  
 6 B<sup>aim</sup> ajjhagā.

## 1041

“Kāmesu brahmacariyavā  
 Metteyyā<sup>7</sup> ti Bhagavā  
 vītaṇho sadā sato  
 saṃkhāya<sup>8</sup> nibbuto bhikkhu, tassa no santi iñjitā,

7 B<sup>ai</sup> -o.  
 8 So Pj.: Fsb. B<sup>ai</sup> saṅkh-.

## 1042

so ubh' anta-m-<sup>3</sup> abhiññāya majjhe<sup>9</sup> mantā na lippati,<sup>10</sup>  
 taṃ brūmi<sup>11</sup> mahāpuriso ti, so idha sibbanim accagā”<sup>6</sup> ti

9 B<sup>i</sup> macche.  
 10 B<sup>a</sup> limp-, B<sup>ai</sup> saṅkh-.  
 11 B<sup>i</sup> taṃ pabrūhi.

3) ブッダは、「自分がこのような戒を守っている」と言いふらす人を「下劣な人」であると、780-787で語っている。

4) 人間が生きて行く指針や理想を「バラモン (brāhmaṇa)」に求める土壌があった (中村元選集 [決定版] 『原始仏教の成立』 p.160 参考)。

それは「梵行ある (brahma-cariyavant)」においても同様であったと見ることができるだろう。ただし、ブッダが説法の中でそれらを語る時、単に理想の姿だけでなく、当時のバラモンへの批判も内蔵していると見るべきである。

元々『スッタニパータ』第4章、第5章には直接的に批判する言葉は少ないが、下の句はバラモンへの批判が出ている箇所である。

1045 ブンナカさんが言った「世尊よ、これらの賢者や普通の人々や王族、バラモン達は、この世で神々に供犠をしました。世尊よ供犠の道を怠らない彼らは生と老を超えたのですか。親愛なる友よ、あなたにお尋ねします。それをわたしに説いてください」。

1046 世尊は答えた。「ブンナカさん、彼らは求め、称賛し、願い、供養をします。利得のために欲望の対象を願っているのです。供犠に専念する彼らは、生存への貪りに染まった人たちであり、生と老を乗り超えていないと、わたしは説きます」。

5) ここで言う「西洋哲学的な論理面」とは西洋哲学の一般的な傾向を述べたもので、特定の思想を指すものではない。「物事を概念化し、その概念に名称をつけ論理的に展開する」ことを指す。概念とその名称による理解及び表現方法は現代の我国においては一般的であるが、もともと江戸時代ペリー来航まで少なかった。「社会 (society)」「宗教 (religion)」「進化 (evolution)」などは英語にあてはめる日本語訳として生まれた。

〈キーワード〉 両極端, 渴愛を離れ, abhijānāti, majjha

(国立県営兵庫障害者職業能力開発校非常勤講師)